

「信長と信玄との『決定的な違い』について」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 信長と信玄との「決定的な違い」とは？

数多(あまた)の戦国武将の中で、最終的に天下統一を果たした人物といえば、いうまでもなく豊臣秀吉(とよとみひでよし)ですね。しかし、秀吉は当初から天下取りに最も近かったわけではありません。彼は「ある人物」が目指していた天下統一へのゆるぎない道のりを引き継いだだけであったことも有名な事実として知られています。

では、その「ある人物」とは誰のことでしょうか。もちろん織田信長(おだのぶなが)のことです。

秀吉と比べるとあまり目立たないですが、家督(かとく)を継いだ際には尾張(おわり、現在の愛知県西部)すら満足に支配できなかった信長が、一代であわや天下統一かと思わせるまで領土を拡大できたという実績は、とてつもなく素晴らしいことでした。

統一を目前にして、本能寺の変で部下の明智光秀(あけちみつひで)に滅ぼされたのが惜しまれる一方で、信長が天下統一を果たした後に、我が国がどのような運命を歩んだのかということなどについて、私たちは大いに興味を持つことができます。

しかし、信長の天下取りは決して順調に進んだわけではありません。多くの困難に打ち勝って自己の勢力を広げた信長でしたが、なかでも最大のピンチだったのが「ある人物」による上洛(じょうらく、京都へ向かうこと)を目指した挙兵であり、それが最終的には失敗に終わったとはいえ、一時は信長もこれまでか、と誰しもが思ったものでした。

では、その「ある人物」とは誰のことでしょうか。もちろん武田信玄(たけだしんげん)のことです。

甲斐(かい、現在の山梨県)を本拠地とした武田信玄は、戦国時代最強とうたわれた騎馬軍団を持っており、その強兵ぶりは周囲の戦国大名を震え上がらせました。また、甲斐には優れた鉱脈を持った金山があり、信玄は軍事力と資金力とを同時に兼ね備えた武将でもありました。

1572年、室町幕府の15代将軍であった足利義昭(あしかがよしあき)の求めに応じた信玄は上洛を決意し、三方ヶ原(みかたがはら)の戦いで徳川家康(とくがわいえやす)を散々に打ち破りました。しかし、その直後に信玄は無情にも病に倒れ、天下統一の夢はついにかないませんでした。

もし信玄が病に倒れなければ、信長を滅ぼして上洛を果たしたのみならず、義昭に代わってやがて

は天下を統一し、武田氏による幕府が開かれていたかもしれないと、信玄の実力を惜しむ人々によって長く語り継がれてきましたが、果たして本当にそう言い切れるのでしょうか。

天下統一を成しとげるには、信玄のように軍事力や資金力を持っていることが重要な条件ではありますが、実はそれだけでは不可能なのです。同じく軍事力と資金力とを両有していた信長が天下取りに近づいたという現実が存在する一方で、なぜ信長にはできて、信玄にはできなかったのでしょうか。

それは、信長と信玄との「決定的な違い」が3つあったからなのです。

さて、信玄の好敵手、いわゆるライバルといえば、いうまでもなく越後(えちご、現在の新潟県)を本拠地とする上杉謙信(うえずぎけんしん)でしょう。信玄と謙信は、5度にわたって川中島(かわなかじま、現在の長野県)で戦っており、特に4回目の戦いは、双方に多数の死傷者が出たうえに、謙信と信玄との一騎打ちの伝説も残されているなど、戦国史上きっての名勝負といわれています。

ところで、この川中島の戦いですが、実は激戦となった4回目以外は目立った戦いはなく、両軍とも戦(いくさ)の途中で引き上げているという事実を皆さんはご存知でしょうか。また、4回目の戦いが行われた時期と、それ以外の戦いの引き上げの時期は、いずれも旧暦の9月から10月(現在の10月から11月)となっているのですが、これは何を意味するのでしょうか。

さらに、5度にわたって戦いを続けるということは、それだけ川中島での攻防に長い時間を費やさなければならないということでもありますが、実際に信玄と謙信は何年間戦い続けたのか、皆さんはご存知でしょうか。

実は、川中島の戦いには「信長と信玄との決定的な違い」の3つのうち、2つまでもが秘められているのです。では、その2つとはいったい何なのでしょう。ここでは、まず川中島での「戦いの時期」から、1つめの「決定的な違い」を考察してみることにします。

2. 一つめの違い ～兵農分離

先述したとおり、川中島での戦いは旧暦の9月から10月(現在の10月から11月)に集中していますし、家康との三方ヶ原の戦いも旧暦の12月(現在の1月)に行われています。つまり、戦いの季節が秋から冬に集中しているんですね。

この時期に戦うこと自体は特に問題ありませんが、どうせなら気候条件の良い初夏か、暑さが和らいでくる初秋の時期に行ったほうが戦いやすいとは皆さんは思われませんかでしょうか。

実は、信玄の立場からすれば、それは不可能な相談でした。なぜなら、信玄は兵農分離ができていなかったからです。

この頃、信玄を含む多くの戦国大名の兵力の大半は、実は地元の農民兵でした。彼らは親や妻、あ

るいは幼い子供などの家族を故郷に残していることもあって、命がけで戦ったために強かったという側面が確かにありました。

しかしその一方で、初夏や初秋のような、田植えや刈り入れなどのいわゆる農繁期(のうはんき)には、農作業に専念させなければ一年の収穫を得ることができません。それゆえに、農民兵は「一年中戦うことができない」という大きな弱点を持っていました。

川中島の戦いが、5度とも現在の10月から11月という、農閑期(のうかんき)の刈り入れ後から初冬にかけてのわずかな時期に行われているというのも、農民兵が一年中戦うことができなかったからであり、短期決戦の4回目を除けば、両軍とも「時間切れ引き分け」によって撤退せざるを得なかったからなのです。

特に、謙信の本拠地であった越後は雪国ですから、本格的な冬の時期は大雪で進軍できなくなるので、戦える時期は余計に短くなりました。

さらに、兵農分離ができないという現実には、同時に大きな問題を抱えることになってしまいました。それは「本拠地を動かさない」ということですが、なぜそうだったのでしょうか。

戦いに勝てば、通常ならば領土が広がります。ということは、より兵を動かしやすかったり、あるいは経済的に有利であったりする場所に本拠地を移動させたいというのは当然の考えだと思われがちですよね。

しかし、地元の農民にとって唯一ともいえる財産は、彼らが所有する田畑であり、農繁期には当然田畑に釘付けになりますから、領土が広がったからといって、田畑を動かさない以上は、そう易々(やすやす)と彼らを移動させることはできなかったのです。

信玄は晩年、より京都に近く、海路も利用できる駿河(するが、現在の静岡県東部)を領有しながら、本拠地を甲斐から動かすことができなかったのも、これが主な理由でした。

兵農分離ができないということに関してですが、実はもう一つ、現代では想像もつかない「過酷な現実」もありました。いったい何のことでしょうか。

農民兵には、自分たちが所有する田畑による生産性こそ持っていましたが、通常は戦国大名から年貢を取られるだけで、収穫のほかに収入らしいものはないために、常に不満を持っていました。そんな彼らの不満を解消する方法が何かといえば、実は「略奪」だったのです。

当時の戦国大名にとっては、戦いに勝って攻め落とした城内や領内で、略奪や婦女などへの暴行を行うのが「常識」でした。なぜなら、それが農民兵たちへの唯一とっていい「戦利品」だったからです。そして、この常識は信玄においても例外ではなかったどころか、信玄自身が敵方の有力武将の妻女などを競売にかけている始末でした。

さて、信玄のように兵農分離ができず、農民兵が中心となった軍勢では様々な問題が起きていたというのは分かりましたが、一方の信長の場合はどうだったのでしょうか。

信長は早くから兵農分離を行い、戦争専門の傭兵(ようへい)を持っていました。命がけで最後まで戦った農民兵と違って、形勢が不利と判断すれば逃亡することが多かったので、兵力そのものは弱かったのですが、何よりも一年中戦えるという強みを持っていました。

また、傭兵は農民兵のように田畑を持っていないことから移動の自由があり、それゆえに戦国大名が本拠地を移しやすいという長所も持っていました。現実には、信長は尾張から美濃(みの、現在の岐阜県)、さらには安土(あづち、現在の滋賀県)と本拠地を何度も移動しています。

農民兵と比べて長所の多い傭兵ですが、それだけ便利であるのならば、なぜ信玄が信長と同じように兵農分離を行って、傭兵を持たなかったのかというのが不思議ですね。しかし、現実には信玄には傭兵を持つことがほとんど不可能でした。なぜ信長には傭兵を持つことができ、信玄にはできなかったのでしょうか。

それは、信長と信玄との間における、経済力の大きな違いが原因だったのです。

傭兵は農民兵と違って生産性がないことから、彼らを雇うためには莫大(ばくだい)な財力を必要としましたが、信長は楽市楽座(らくいちらくざ)などで自領の商業活動を活発にし、また当時随一の貿易港である堺を支配下におくことによって経済力を高め、傭兵を可能としていたのです。

一方、信玄は金山こそ持っていたものの、それが限りある資源である以上、傭兵を常に雇い続けるには無理があったのが現実でした。

ちなみに、鉄砲などの近代兵器を信玄が信長のように数多く所有できなかったのも、同じ理由からです。

特に火薬の原料となる硝石(しょうせき)は、当時は国内では生産されなかったため、海外からの輸入に頼っていました。従って、信長のように巨大な貿易港を抑えることが重要だったのです。

また、信長による傭兵は、新たな城や領内に入っても略奪などの行為は一切しませんでした。信長が固く禁じていたからというのが大きな理由ですが、なぜそのようなことが可能だったのでしょうか。

実は、略奪を必要としないだけの給金を傭兵たちに与えていたからなのです。

普段から略奪を必要としないだけの給金を渡していれば、兵たちへの抑えも利くというものです。そのために必要な莫大な財力も、経済力を高めた信長にとっては何の問題もありませんでした。

傭兵たちの中には、例外的に略奪行為をするような不心得者もいましたが、事実を知った信長は激

怒して彼を捕まえると、木に縛(しば)りつけたうえでさらし者としました。この馬鹿者は例外である、と強くアピールしたのです。

自分の領内に、略奪や暴行を働きまくる兵力と、それらを一切せずに自分たちを守ってくれる兵力の二つが存在したとすれば、皆さんはどちらを選びますか。答えはいうまでもないですよ。地域の住民の支持を集めるのも、天下統一への重要なポイントだったのです。

以上述べたとおり、信長と信玄との「決定的な違い」の1つめは「信玄の軍勢は兵農分離ができていなかった」ことでした。では、2つめはいったい何でしょうか。

カギを握るのは、先述した「川中島での攻防にかけた時間」です。

3. 二つめの違い ~天下取りへの明確なビジョン

天下統一への一番の近道は、何といたっても上洛することでした。上洛を果たして、有名無実と化していた室町幕府の後ろ盾(だて)となって自らの権勢を高めれば、その後の天下取りへの道が開けてくるからです。しかし、信玄自身が上洛を決意したのは、50歳を過ぎた最晩年になってからでした。実は、そこまで信玄の決断を遅らせた原因こそが、川中島の戦いだったのです。

信玄と謙信は川中島で5度戦っていますが、彼らは何と11年間(1553年~1564年)も戦いに費やしているのです。そもそも川中島の戦いは、信玄が信濃(しなの、現在の長野県)の北部を征服した際に、前の領主であった村上義清(むらかみよしきよ)が領地回復を謙信に訴え、謙信がこれに応じたことで信玄の宿敵となったことから始まりました。

多くの血を流すなど、様々な苦労を重ねてせっかく手に入れた新たな領土ですから、信玄の必死の思いも分からないことはないですが、それでも10年以上も戦い続けるというのは、余りにも時間を浪費し過ぎてはいないでしょうか。

もし信玄が上洛の意思を早くから持っているのであれば、目先の利益である北信濃よりも、上洛のための通り道(例えば美濃)を早めに抑えることがはるかに重要でした。極論すれば、北信濃は村上氏に返して恩を売り、また謙信とも同盟して後顧(こうこ)の憂いを断てばよかったです。

戦国時代きっての名勝負とうたわれた川中島の戦いも、天下統一のための重要な第一歩である上洛を目標と定めるのであれば、必ずしもやらねばならないものではなかったのが現実でした。

一方の信長ですが、目先の利益にこだわった信玄とは全く対照的な動きをしているという事実を、皆さんはご存知でしょうか。

信長は、1560年に桶狭間(おけはざま)の戦いで今川義元(いまがわよしもと)を滅ぼしましたが、通常の戦国大名なら真っ先に考えるのが、当主亡き後の今川氏の領土を奪い取ることでした。

今川氏の領土は三河(みかわ、現在の愛知県東部)から遠江(とおとうみ、現在の静岡県西部)、駿河と広がっており、これらの国は気候が温暖で収穫も多く、海の幸にも恵まれ、さらには金山もあるという経済力豊かな地域でした。

しかし、現実の世界において、信長は今川氏の領土には目もくれず、徳川家康と同盟を結んで、家康に今川氏の攻略を任せたいうえで、自らは美濃の征服を目指しています。なぜ信長はこういった手段を選んだのでしょうか。

実は、この選択こそが、信長による「天下統一へ向けての明確なビジョン」だったのです。

ここで信長の気持ちになって考えてみましょう。確かに、今川氏の領土はいわば「宝の山」ですが、信長が仮に三河・遠江・駿河の三国の領有に成功したとしても、信玄や北条氏康(ほうじょうじやす)といった強力な戦国大名と領地が接してしまいます。

ということは、信長は自己の領地を守るために、信玄や北条氏への抑えとして常に大軍を彼らとの隣接地に置かねばならないこととなります。そんな「防衛するのが精一杯」の情勢において、天下取りの第一歩として上洛を目指すようなことが可能でしょうか。

そこで、信長は奪えるかもしれない今川氏の領土をあっさりと捨てて、家康に三河の攻略を勧めることで、いわば三河を「クッション」として自領の尾張を「安全地帯」にしたうえで、後顧の憂いをなくして美濃を攻め取り、上洛への道を確保したのです。

これらの事実から、信長には早くから上洛を目指すという、明確で先見性のあるビジョンがあったといえるでしょう。一方、信玄は上洛を決意してからわずか半年後に、病に倒れて亡くなってしまいます。北信濃という「目先の利益」にこだわり、天下取りへのビジョンを持たなかったがゆえの、信玄の「余りにも遅すぎる」上洛への決断でした。

信長と信玄との「決定的な違い」の2つめは「信玄は目先の利益にこだわり、天下取りへの明確なビジョンを持っていなかった」ことでした。1つめの「兵農分離ができていなかった」こととともに、信玄の天下取りに対して大きな影響を及ぼしたといっても差し支えないでしょう。

ということは、もし信玄の軍勢が兵農分離を可能として傭兵を雇うことで一年中戦うことができるようになり、また信玄が早くから天下取りへの明確なビジョンを持ち、寿命のあるうちに上洛を果たすことができれば、信玄による天下統一は可能だったのでしょうか。

答えは残念ながら「No」です。実は、信玄は信長との決定的な違いの1つめや2つめを克服できたとしても、それらよりももっと重要で、かつ致命的ともいえる「3つめの違い」があったのです。そして、この3つめが存在する以上は、仮に信玄が天下を統一できたとしても、その政権は決して長続きできないと断言できる事情もありました。

では、その「3つめの違い」とはいったい何でしょうか。カギを握るのは、「信玄」という彼の名

前です。

4. 「決定的な」三つめの違い ～政教分離

信玄の本名は晴信(はるのぶ)といいますが、出家して仏門に入ったことによって、法名(ほうみょう)である「信玄」を名乗るようになりました。仏門に入ったということは、信玄が宗教勢力の一員となったことを意味しますが、実はこれこそが信玄の天下取りへの最大の「障害」となってしまったのです。なぜでしょうか。

その背景には、現代に生きる私たちが誤解している「戦国時代の宗教に関する事情」があります。

現代の宗教に対する印象といえば、特に仏教に関しては「お坊さんが有難いお経を読む」という平和なイメージしかありませんが、これが定着したのは江戸時代以降のことです。実はそれ以前、特に戦国時代には自分の身を守るために多くの宗教勢力それぞれが、僧兵などの武力を持っていました。

その中でも一向宗(いっこうしゅう、浄土真宗のこと)の熱心な信者たちは、女性や子供、あるいは老人までもが武器を持って戦っていました。そして、京都などの有力な布教地では、宗教同士の勢力争いによって、血で血を洗う戦いが繰り広げられました。

例えば、1532年の法華一揆(ほっけいっき)では、日蓮宗(にちれんしゅう)が一向宗を追放しましたが、4年後の1536年に起きた天文法華(てんぶんほっけ)の乱では、天台宗(てんだいしゅう)の比叡山延暦寺(ひえいざんえんりやくじ)によって日蓮宗が京都を追われています。いずれの戦いも約70年前に起きた応仁の乱に負けず劣らずの激しさで、京都は焦土と化し、宗教勢力は地元の人々の恨みを買っていました。

宗教勢力は、僧兵などの武力を確保するために地元の周辺に関所を置いて通行税を取ったり、自己の勢力内で商売をするのに税金をかけたりました。関所や税金によって利益が上がれば、他の宗教勢力に奪われないように武力を強化し、武力を強化すれば、彼らを食わしていくために関所を増やしたり税金を上げたりして、それで利益が上がればさらに武力を増やしていく。

このような連鎖が続けられた結果、16世紀の後半までには、宗教勢力のそれぞれが、政治力や財力を持った巨大な圧力団体と化してしまっていました。そして、強大な武力を持つ宗教勢力には誰も逆らうことができず、人々の暮らしや商業の発達に大きな障害となっていたのです。

当時の人々の多くは、大きな障害と化してしまった宗教勢力を追放して、元の過ごしやすい世の中に戻してほしいと熱望していました。そんな中で、仏門に入ったことで宗教勢力の一員となった信玄が仮に天下を取ったとしても、果たして人々の望みどおりの改革を成しとげることができるでしょうか。

信玄は、信長が比叡山を焼討ちした際に天台座主(てんだいざす、延暦寺の最高位の僧職のこと)を自国で保護

しており、また座主から権僧正(ごんのそうじょう、僧職の最高の地位のひとつ)の地位を贈られた際には、その法衣(ほうえ、僧の着用する衣服)をまとして悦(えつ)に入(い)っていた(=事がうまく運び、満足して喜ぶこと)というエピソードも残っています。

大変残念ながら、そんな信玄が宗教勢力に対して大ナタをふるえるとはとても考えられません。

武力によって世の中を統一することができたとしても、それが地域の住民(あるいは国民)の理解を得られなければ、その支配は決して長続きできないのです。

例えば、武士として初めて政治の実権を握った平氏は、摂関家と同じように貴族化してしまったことで、自分たちのための政治を行って欲しいと願っていた、当時の国民の代表たる武士たちの期待を裏切る結果となり、源頼朝(みなもとよりとも)が挙兵してからわずか数年後に滅亡しています。

それでは、信長は宗教勢力に対していったいどのような態度をとったのでしょうか。

信長は入洛後、宗教勢力に対して「今後は自分がお前たちを守ってやるから、武器や権益を捨てるように」と命令しました。しかし、一度握ってしまった巨大な権益を手放すのがもったいなく思った宗教勢力はこれを拒否したのみならず、逆に信長を滅ぼそうとしました。

命を狙われて激怒した信長は、自衛の意味も込めて比叡山延暦寺を焼討ちし、また一向一揆(いっこういっき)の勢力を、女子供に至るまで攻め殺しました。信長のこれらの行為は、現代の道徳観や倫理観からすれば許されざるものではありませんが、当時が食うか食われるかの戦国時代であったということを考えれば、ある意味では仕方がないという一面もあります。

また、これも皆さんが勘違いされていることが多いのですが、信長は自分を倒そうとした宗教勢力には容赦なく牙(きば)をむきましたが、宗教そのものは決して弾圧していません。

例えば、延暦寺の焼討ち後も天台宗の禁教令は出していませんし、一向宗が後に大坂(おおさか、現在の大阪)の石山本願寺を明け渡した際にも、今後の布教は自由としているのです。ちなみに、後者については現在でも西本願寺に証拠となる文書が残っています。

信長によって、巨大な権益を持っていた宗教勢力は解体されましたが、天台宗や浄土真宗などの宗教そのものは現在も残っています。実は、これこそが本当の意味での「政教分離」であって、江戸時代以降、現在に至るまでの私たち日本人に対して、宗教が政治に関わることによって生じる様々な問題とは無縁にしてくれているのです。

いずれにせよ、当時の国民の切実な願いでもあった、巨大な圧力団体と化した宗教勢力の排除に成功した信長が、多くの国民から歓迎されたからこそ、信長が志半ばで滅ぼされた後も、その後を継いだ秀吉や、あるいは家康によって戦国の世は終わりを告げ、江戸時代を迎えることになったのでした。

天下を統一して、戦国時代を終わらせるという大きな目標は、豊富な経済力で兵農分離を実現するなどといった、それまでの常識にこだわらない柔軟な姿勢のみならず、天下取りへ向けての明確なビジョンを持つとともに、どんな圧力にも屈しないという強い信念に基づく実行力によって、初めて可能となったのです。

そして、それらの要素をすべて持っていた信長だったからこそ、時代は彼を「英雄」として選び、その一方で、信長との決定的な「3つの違い」を克服できなかった信玄やその子孫たちは、歴史の表舞台から姿を消していったのでした。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 9 戦国野望編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379420>

YouTube 再生リスト「信長と信玄との決定的な違いについて」
https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6pLcCsYAM3IjVnnOJ_AJHb

黒田裕樹の歴史講座
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>